

日本労農党の成立：中間派社会民主主義の源流

MASUJIMA, Ko / 増島, 宏

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

14

(号 / Number)

下

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

37

(発行年 / Year)

1962-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009000>

日本労農党の成立

——中間派社会民主主義の源流——

増 島 宏

はじめに

一、総同盟と日本労農党

(1) 中間派の萌芽——第一次分裂と全日本鉱夫総聯合

(2) 総同盟内における「正義派」

二、日本農民組合と日本労農党

三、中堅同盟と日本労農党

四、『社会思想』と日本労農党

——思想的基礎——

むすび

はじめに

最近戦後の社会民主主義政党に関する研究がいくつ出版された。また社会民主主義諸政党的内外でその構造や思想上の特質についての認識が深められ、体質改善が論ぜられるようになってきた。このことは従来きわめて乏し

かった日本の社会民主主義研究にとっては一步の飛躍を意味する。しかし、これらの研究に共通していえることは、戦前の「無産政党」に関する研究と、それが戦後の社会民主主義諸政党に色こく残した母斑についての考察が少いことである。たしかに戦後の内外情勢の諸変化は巨大なものであり、そこに一つの断絶が横たわることとは否定できない。しかし、その断絶ないしは飛躍の意味を知るうえにも戦前および戦中の研究を無視することは誤である。ましてや、現在の日本社会党あるいは民主社会党のリーダーの多くはいぜんとして、戦前からの運動家である場合が多いのである。だから、戦前、戦後を通ずる社会民主主義の歴史的特質を解明することなしには、現在の社会民主主義諸政党を十分に分析することは不可能である。

本稿はこのような意図をもって、戦前の「無産政党」の実証的研究を行ったものである。「無産政党」研究の本格的なものは戦前には若干あるが、戦後はきわめて乏しい。しかし最近社会民主主義運動の指導者達の伝記や回想記があいついで出版され、比較的史料を入手し易くなった。だから、日本の社会民主主義の研究をもう一步深めるためには、戦前の無産政党の解明を試みなければならぬ。またその機は熟しているのである。このようなときに法政大学大原社会問題研究所には浅沼稻次郎氏や河野密氏の残された日本労働党や社会大衆党などの決議、会計簿、書簡、通信類などほとんどそのまま所蔵されていた。われわれはまずこの史料を整理することから始めた。この資料にもとづいて一応「日労党史」の素描を完成した。本稿はその成立史の部分をなすものである。ここでは、日本労働党の成立史を探ることによって、日本における中間派社会民主主義の思想的、組織的源流を明らかにしようとしたものである。

法政大学社会学部がすでに創立十周年を迎えたが、その創立以来の教授であり、私の学問的指導者である逸見重雄教授、

村山重忠教授に本稿を捧げたいと思う。それによつて、東南アジア視察旅行が忙殺され、選歴記念論文集に執筆できなかつたおわびのしるしといたす。

一、日本労働総同盟と日本労働党

日本労働党（日労働）の主要な源流の一つが日本労働総同盟（総同盟）内にあったことはたしかである。もちろんこの中間派的潮流は一貫した方針のもとに存在しつづけたわけではなくて、いくたびかの動揺をくりかえした後、ついに日労働の結成に至るわけである。

(1) 中間派の萌芽——第一次分裂と全日本鉱夫総聯合

一九二四年（大正十三年）の総同盟第十三年大会は「劃時代的大会」といわれる。それは、労働運動の方向転換をめぐつて、激論が斗わされた後、一致して「宣言」が採択され、新しい方向を示したからである。その「宣言」には次のような箇所がある。

「然れども若し吾等が今後猶依然として、旧來の態度を持続するならば、それこそ大なる誤りであり、過失を犯すものである。何故ならば今や吾等は過去におけるよりも、其政策をより現実化し、積極化させねばならぬ必要に迫られて居る。而して、其必要は最近に於ける我國資本主義の示しつつある傾向と労働階級の勢力の増大を、吾等が正確に觀察することを得たからである。我國の労働組合運動は少数者の運動から転じて大衆の運動に向ふべき一階段に到達したのである。改良的政策に対する従来の消積的態度は、積極的に之を利用することに改められなければならない。例へばブルジョア議會に依つて、労働階級の根本的解放を期待する處、毫もなきは勿論なれども、普選実施後に於いては選挙権を有効に行使することに依りて政治上の部分的利益を獲得すると共に無産階級の政治的自覚を促し、又國際會議に就いても之が対策を慎重に考慮し、以つて我國労働組合發展の爲に計るべきである。

我等は階級的利害の一致に依り、分立せる労働組合の合同は勿論、組織せざる労働階級の結束を計り、現実的利益を獲得

しつゝ終局の目的に向つて進むべき労働組合運動本来の面目を發揮しなければならぬ。吾等は明徹なる批判力と階級意識に目覚めたる今日の戰鬥的労働組合員は、支配階級が労働階級の革命的な精神を鈍らすために興へんとする改良的政策を利用するとも、断じて墮落せざることを信ずるものである。

吾等が無産階級解放運動は、今後と雖も隨時敵の状勢と味方の勢力の変化に應じて其戦術も変更されなければならぬ。然しながら如何に現実の必要の爲めに、政策上に変化が行はれようとも、無産階級解放の根本精神に就いては毫も交りなき事を誓明する。」(法政大学大原社会問題研究所、『日本労働組合評議会資料その四』)

このいわゆる画時代的方向轉換の宣言は満場一致で可決されたものである。しかし、この方向轉換の意義のとりえ方は、必ずしも同一ではなかつた。むしろ、その後の様々な無産運動の潮流はすべてこの意義のとりえ方の差異によつて生じたといつてもよい。麻生久は「二個の偶像＝轉換期に方向を誤るな」と題する一文で、次のようにべている。

「今回の大会に於ては頻りに現実ということが問題になり、其宣言の精神も亦空想的理想主義を退けて、運動を現実の上に立たしめる事を主張しているのである。私は運動がその根底を現実の上に立脚せなければならぬ事に毫も異存を含む者ではなく、従来も亦斯くの如く主張して来たのである。併しながら今特に現実と云ふ事が問題になつたに對して、我々が注意しなければならぬ事は、皆て、理想を偶像化して空想に陥つたが如く、今度は現実を偶像化して遂に運動の革命的な精神を滅亡せしめんとする事である。労働運動は單なる労働条件の維持改善の運動でない事は今更云ふまでもない。その点は又宣言中に明示せる通りである。併しながら今後特に現実に立脚して事実に改良的手段を採用する事を宣言する以上、實際上の運動は必ずや右傾して、改良的運動を濃厚ならしむるは避けがたいところである。人間が環境の子なるが如く、運動も亦環境の支配をまぬかれざる事は云ふを俟たない。其革命的精神を失はずと称するも次第に運動が政府と資本家とに接近して行き、そこに改良的手段による甘い蜜が垂れて来る時、誰れか其革命的精神の紛失せざる事を保証する事が出来よう。況んや、運動が現実の偶像に傾いて、一にも現実、二にも現実と云ふに至つては其危険は論外である。

私は今後此宣言に依つて實際的活動をなさんとする中央委員諸君に向つて、今日此警告を發せざるを得ない者である。」

この麻生の論文には、麻生および彼がリーダーである全日本鉦夫総聯合（鉦夫総連合）の総同盟中央に対する一定の姿勢がみられる。すなわち、方向転換の意義は一応みとめつつも、総同盟中央が改良主義の方向に走ることを強く警戒していたのである。このような傾向は、翌年の大会とそれにつづく中央委員会ではさらにはっきりする。すなわち関東同盟の内紛をめぐって、右派は関東地方評議会の辻井民之助、鍋山貞親、中村義明、山本懸蔵、杉浦啓一、渡辺政之輔の六名を除名しようとし、第十四年大会は、「総同盟の危機」の声のなかで開かれた。しかし、この大会では除名動議は提出されなかった。ところが直後の中央委員会（一九二五年三月二七日）には、関東、大阪の中央委員の打合せのもとに、関東地方評議会の解散、機関紙の発行禁止、六名の除名が提案されたのである。この除名派と評議會を中心とする刷新派との対立のなかにあって、鉦夫総聯合の態度はどうだったか。当時中央委員だった加藤勘十は次のようにのべている。

「四月十一日の中央委員会——最後の決定を興へる——では、吾々は依然として、除名反対で進んだ。けれども鉦山運動の現実情勢は吾々が、除名派から被除名派と同一立場に在るものとの逆宣伝を受けることができないう事情に在る。さればとて、運動に従ふもの一人として、自己の階級的良心を枉げての行動はとれない。吾々はこのときばかりは全く弱らされた。鉦夫総聯合会では麻生、可児、高梨、関家、高橋、私と関係者一同慎重に熟議して、吾々は「あくまで除名に反対し、同時に総同盟を脱退して独立しよう」と云ふことに極力かけた。然るに大阪の藤岡が来て、『若し鉦山がさう云ふことにきまるなら自分はどう運動がやれんから、運動の一切から手を引いて田舎に引っ込む』と涙を流して、吾々の決意の翻意を求めた。元来が、熱情的感激的分子の多い鉦山の連中のことよて、この藤岡君の泣き落としにかゝって、それでは己むを得ん、運動の頭初から一所に来た同志を殺す訳には行かないと云ふことになって、眼をつむって除名派に賛成することになったのである。これは独り人情的感情に支配されたばかりでなく、鉦山の現実情勢が吾々に泣いて除名派に賛成せしめるに至

ったのである。全国——地域的には刷新派が広々——二五組合の要望も顧慮されることなく、一切が拒絶されたのである。」
(加藤勤十「階級戦の先頭を往く」一九二八年、一九六頁)

これは『麻生久伝』にも引用されている一文であるが、赤松克磨もこの第一次分裂に際してとった鉱夫総聯合と麻生らの態度を中間派の発生と考えている。たしかに、斗争の激化にともなうて、左右両翼に反対しながら、どちらかといえば右派におし流されていく中間派の特徴を示しているものといえよう。恐らく麻生久、棚橋小虎らには早くから総同盟幹部の右翼的傾向にあきたらないものがあつたのであろう。そしてこうした血気盛んな青年をいれるには、都会の葛藤から離れた鉱山の空気は恰好のものであつたにちがいない。

(2) 総同盟内における「正義派」

「日本労働党創立の経緯と雑感」と題する一通信記事は総同盟内の二つの潮流について次のようにのべている。

「総同盟内には第一次無産政党当時より、二箇の意見が行われた如くである。それは共産系排除の根本方針は完全に一致であつたが、その態度、手段、限度に就ては多くの差があつた。即ち鉱山系を初め関西方面の中川、藤岡君其他関東方面の望月、岩内君等は積極政策を主張し、労働党支持を固持した事と、二は松岡、赤松君等を中心とする関東同盟の多数は消積政策、「脱退を一時も早く」主張する人々が之れである。以上の如き総同盟に於ける二箇の流れは交錯しつゝ、常に暗黙裡に対立し、然も日に相反する傾向に進展し来つたもの様である。」

この間にあつて、麻生の立場はどうであつたが。

「昨年来の麻生氏政治部長たりし当時、政党問題に対する政治部の意見は、中委員会の決議と共に殆ど積極策の下に決定されたものであつたが(例えば、支部組織方針の指令を出した如き)、然も事實は正反対に労働党に対するサポーターの態度が続けられたので、去る十月の全国大会に於ける麻生氏の政治部長失脚は諍する所このチレンマの結果と考えられよう。」(『労働問題通信』二三三三号一九二六年十月二四日)

以上の『通信』の記述はかなり正確なもののように考えられる。鈴木文治もまたこの大会（一九二六年十月三日—五日）における総同盟内部の意見の対立についてほぼ同様のことをのべている。

「農民組合内部に抬頭しつゝある現実派を救い出す意味においてこれと提携すべく党を支持すべしとするもの（麻生君等）と、これに反して、農民組合に見切をつけて直に脱退すべしとするものに相對峙するに至ったが、結局内部の平和の爲め、四団体の排除を強調して党を支持すべしとすることを決定した。」

しかし、この大会のしばらく後に開かれた労働農民党第四回中央委員会（一九二六年十月二四日）では、早くも総同盟は脱退を宣言している。すなわち、執行委員会開会後議事に入る直前、先ず労働組合総聯合、日本司厨同盟、東京市電自治会の三団体署名で脱退声明書が提出され、総聯合の坂本孝三郎から脱退の挨拶があり、続いて官業労働総同盟の渡辺善嘉、総同盟の西尾末広から脱退声明があり、退席した。この際の総同盟の「労働農民党脱退に関する声明書」は次の如くである。

「抑々労働農民党は其の創立の当初に於て、共産系勢力を抑制すべきことを申合せた。之れ共産系勢力と事を共にすることとは、党の健全なる発達を図る所以でなきことが、創立委員の間に確保されたからである。而して去る七月二六日第三回の党中央委員会に於ては、党の基礎の確立するまで、共産系四団体の勢力を一切排除すべきことが、満場一致を以て可決されたのである。然るに其後、日本農民組合は右の決議に反して、四団体に属する者と共に党支部を組織し、且つ党本部がその中止を報告したるにも拘らず、共産派の提唱せる議會解散請願運動に参加して、少しも党の規律を守らず、更らに、去る十月十日及二二日の同組合拡大中央委員会は右四団体に對する門戸解放を決議し共産系排除の誠意なきことが明瞭となった。即ち、党構成の重要分子たる農民組合と、吾が総同盟とは、共産系排除と云ふ根本的重大なる問題に就て、その意見を異にする事が明瞭になり、従つて、協力一致して、党の健全なる発達を圖る望なきことが明白になったので、吾が総同盟關係の党中央執行委員は茲に断然脱退するに到つたのである。

吾等は、経済的にも政治的にも、共産系勢力との共同戦線を拒み、指導精神並に實際政策に於て、大体傾向を同じくする

勢力との協同を図ることが吾等の全国大会の精神に添ふことであり、また、わが国無産階級運動の健全なる発達を促す所以であることを固く信じて疑はざるものである。

大正十五年十月二十四日

日本労働総同盟

会長 鈴木文治

政治部長 西尾末広 (『労働』通巻一八五号、一九二六年一月)

この労働農民党脱退に関して、鉾山の状況はどうであったか。加藤勘十は、次のように記している。

「第二次の労働農民党からの脱退は全く意外であった。

争議(別子鉾山のストライキ、筆者注)には大勝利を占め、鉾夫組合の基礎も東北常磐にかけて、揺ぎなき磐石の上に立つことになったから、今度こそは少数幹部の専制的行為である労働農民党脱退について抗議せんと、尾去沢に來援中であつた石山君、上原君に相談すると両君とも私の意見と同一意見であつた。私は争議の後始末其他で十一月中旬でないと帰れないからと云ふので、石山君が先きに歸つて、足尾の意見をまとめて抗議運動を起す約束で急遽尾去沢を引き上げた。私は中央の情勢は少しも判らないが、小坂、花輪等の農民組合の諸君とは「総同盟の労働農民党脱退には反対であり、若し、吾等の反対意見が容れられない場合は、秋田―尾去沢―だけは諸君と行動を共にせん」と協議しておいた。」(加藤、前掲書二六八―二六九頁)

以上をみても、総同盟内の、鉾夫総聯合(一九二五年十月三日、日本鉾夫組合と改称)は、各地域における日本農民組合(日農)との結び付きも強く、また総同盟中央の脱退方針についてきびしい批判をもっていたことが明らかである。こうして、一方では、日農の左翼化、他方では総同盟中央の右翼無産政党結成のうごきのなかで、終始動揺をつづけていた麻生らも、やがて中間派政党結成という新しい方向にふみきることになったのである。

労働農民党より脱退した総同盟は、一九二六年十一月四、五日、中央委員会を召集して協議したが、同四日公表された吉野作造、安部磯雄、堀江帰一、三博士の提唱にもとずいて、右翼政党結成の具体的行動を開始した。そし

て十一月二十日には結成協議会のはこびとなった。このような情勢のなかで、麻生らはいよいよ中間派政党結成の決意を固めるに至った。

すなわち、麻生久、三輪寿社、須永好、三宅正一他二七名発起人の「親愛なる全国の同志諸君！今や我等は身を以て混濁せる無産階級運動に正道確立の爆弾を投ぜんとす。秋は来れり！無産階級運動の正道を確立せんと欲する同志は来って協力せよ」という日本労農党結成趣意書が発表されたのは、それから僅か三日後の十一月二三日のことであった。

西尾末広は、このような超スピードの日労党の出現について「まさに晴天のヘキレキというものであった」と表現している。そして、麻生が総同盟右翼幹部に反撥した理由について、次のようにのべている。

「当時総同盟では松岡・西尾の労働者出身が勢力を得て、その指導権がインテリから労働者に移りつゝあることに不満があったようである。また思想的にも麻生君らは社会民主主義にはなりきれないものがあつた。

それにまた油を注ぐ結果になつたのは、麻生君の指導していた鉦夫組合は不振続きで会費も殆ど本部に納まらぬ。しかもその運動の現場は何れも遠隔の地にあり、組合運動推進のためには多くの費用を要する。勢い総同盟の会計に依存することになるのだが、その財布を握っているのが主事兼会計の松岡君である。会費は納入せずに支出ばかり要求することに対して、松岡君がこれを渋つたことも当然だ。いよいよ不満はつづいて来たようである。」(西尾末広「大衆と共に―私の半生の記録」一九五一年、二五一頁)

すなわち西尾は、麻生の日労党へ走つた原因として、インテリの労働者幹部への不信、思想的相違、鉦夫組合の行詰りの三つをあげているのである。たしかに麻生らが力をつくしてきた鉦夫組合の行き詰りは、彼らの総同盟内の地位を不安定にしたし、いわゆる総同盟幹部内のインテリ派對労働者派の対立も麻生らにとって決定的に不利であった。同じく反共的立場に立つにしても、思想的にも左右のちがいはあつた。一方、総同盟の労農党よりの脱

退、政党樹立の方向には批判的な多くの組合員があった。その一部は、「労働党脱退反対運動にその尖端を現わし」(山川均「無産政党分立期」・『社会科学』一九二八年二月) ていた。このような大衆を自己の指導下におさめることによって、新たな政治的生命をみいだそうとする努力が、中間派政党の結成となったのである。それは右派的指導にあきたらない自然発生的な大衆の反対運動を、中間派のわくに固定化する結果をもたらしたのである。

一九二六年十二月三日、総同盟中央委員会は麻生久、加藤勘十ら十二名の指導者とともに日本鉦夫組合、関東合同労働組合、関東紡織労働組合の除名を決議した。それに対し、日労働支持を主張して、日本鉦夫組合、関東合同労働組合などが脱退し、同夜脱退声明書を発表した。これらの組合は、翌四日に本鉦夫組合本部に集り、日本労働組合同盟(組合同盟)の創立を決定し、十二月七日創立委員会を結成することを決議した。この創立委員会は日労働党および労働総連合準備会の直後に開かれた。ここで、日労働支持のためにまず労働総連合の準備会をひらくこと、日労働の結党式を一日延期するよう申し入れた。

かくして、十二月九日、前日の労働総連合準備会のあとをうけて、日労働は正式に結党されたのである。

二、日本農民組合と日本労働党

総同盟の内部から、日労働の第一の支柱が生れたとすれば、第二の支柱は、日本農民組合(日農)の中からうみだされた。すなわち、日労働のリーダーはほとんど、総同盟ないしに日農の一部の指導者であり、党の支持団体である日本労働総連合の構成は、総同盟から脱退した組合同盟、日農から脱した全日本農民組合が主要なものであり、これに中立系組合の一部である中堅同盟が加わったものであった。では日農の内部から、いかにしてこれらの

中間派勢力がうみだされたのであるか。

日本農民組合は一九二二年創立以来、小作争議の激化するなかで、急速にその組織を拡大した。創立当時十五支部、組合員二五三名にすぎなかったものが、一九二四年には早くも四二、六三九名に達し、その後も拡大を続けた。こうして、普選が現実の日程に上る一九二五年（大正十四年）頃には、日農も無産政党組織問題について、活潑にうごきはじめた。一九二五年二月三日は、大阪の日農本部で、総同盟、官業労働総同盟、日農の共同主催により全国労働組合協議会が開かれた。これは組合運動の全国的機関の設置と、無産政党樹立促進との中心問題を結びつけることを目的としたものであった。この協議会は結局、成果をうることなくウヤマヤのうちに消滅するが、この協議会の試みのなかに、日本農民組合の無産政党組織問題における一定の地位を知ることができる。山川均は次のようにのべている。

「当時はなほ、労働総同盟は日本農民組合の上に、相当の影響力を持って居り、両者の関係は、その後におけるよりも、遙かに緊密であった。それと同時に日本農民組合をして、この全国労働組合協議会の提唱者の一人たらしめたこと、さらに二月三日の会合の結果は、日本農民組合の代表者をして、協議会の創立世話人たらしめたことは、日本農民組合の重要な地位が意識されたことを意味するものであって、その後の無産政党樹立運動のうちに日本農民組合の演ずべき役割を前影したものであった。」（山川、前掲論文）

このように、日農は、すでに労働組合の間に伍して損色ない組織力を備えていたし、当時の地主勢力の政治的結集の前進のなかで、無産政党の必要を強く意識しはじめていた。しかも労働組合の対立抗争は、必然的に日農に無産政党樹立運動におけるイニシアチブをもたせることになったのである。

一九二五年五月、普選法が公布され、政党の樹立は急務となった。かくして総同盟第一次分裂の後、日農は一九

二五年六月二日、一、〇〇〇名以上の労働団体三一組合に「無産政党組織の提議」を行なった。この提議に応じ、七月十日第一回の準備会が開かれ、無産政党樹立は具体的な展開を示すに至った。かくして農民労働党の結成、直ちに禁止、つづいて労働農民党が結成された。この間、日農は終始党結成の中心的存在となつたのである。

しかしこの頃、農民闘争の前進のなかで、農民の意識化が進むとともに、左翼すなわち日本共産党系の勢力は、日農内で確固たる地位をしめるに至った。特に学生出身の書記や、青年農民の積極的活動は著しいものがあつた。労働農民党創立後、一九二六年三月十日―十二日、京都で第五回大会が開かれたが、その前日に独立部門として青年部が設立された。左翼の進出に対して、右翼は早くから反撥していたが、第五回大会ではついに脱退し、やがて分裂組織「全日本農民組合同盟」を設立した。これには山梨県聯合会が中心となり、北日本農民組合（新潟、山形）、大和農民組合（岐阜）、能義八束農民組合（島根）等が加わつた。この後、平野力三らは一九二六年十月には、これを基盤として日本農民党を結成したのである。

また知識分子と総同盟内にも、右翼無産政党結成のうごきがあつた。すなわち農民労働党の禁止の後、安部磯雄、吉野作造、賀川豊彦らを中心として、独立労働協会が結成された。これは「無産政党の組織を外部から促進し、かつ無産政党に必要な調査を行なうことにあつたが、実際には、必要な機会に右翼政党を組織し得るための準備であつた」（山川、前掲論文）。このような右翼政党結成のうごきに対して、日本農民組合は単一無産政党結成のイニシアチブをとろうとしたのである。

労働農民党は、はじめから左右のはげしい対立をはらんでいた。その爆発点はすでにのべたように十月二四日の第四回中央委員会であつた。

総同盟幹部の右翼政党组成のうごきに対して、最初動揺していた麻生も、やがて中間派新党组成の方向に決意するに至った。そして対日農工作に全力を傾けた。それは次のように行なわれたといわれている。

「麻生は当時総同盟内部の正義派の同志の糾合には、既に相当な自信をもち、且つ又多年の同志との訣別に当って、強いて醜い分裂闘争の絵巻を展開するを好まなかった。従つて総同盟の内部工作については、最後の決心を固めた直後に、自身としてはまず第一に上条と共に足尾と常磐の同志に諒解を求むるために出かけた位で、その他については同志の活動に委ねて、彼は農民組合等の外部工作に主力を傾けた。

平野学は当時麻生の秘密的立場にあつて、日労党結成の計画にも深く参画したが、麻生は彼に対して、「新党の結成は東京の労働組合は既に定つたが、天目山は農民組合の攻防である。これはむづかしい。若しこれに失敗すれば新党は不発に終る」といふ、その作戦は慎重であつた。」（『麻生久伝』一九五八年、二六九頁）

日農は早くから単一無産政党组織の中心的存在であつたし、すでに平野らの右翼を切落し、全体としては労農党支持の態勢にあつた。このなかに新党组成のための分裂をもちこむことはかなり困難であつた。しかし日農内にも、右翼に反対するとともに一部の指導者および青年らの行動を極左的と考え、これに反感をもつ要素はかなりあつた。一九二六年十一月二六日付の山上武雄の須永好宛の親書には、この間の事情がよく表現されている。この手紙は極めてよく引用されるが、その一節を次にかかげよう。

「此際農民組合内の極左を排すために極右の人々と握手を続けるやうなことがあれば折角の兄等の尊い計画もまた価値の薄いものとなると思ふ。関東一帯の中央委員が署名してをるのだから、中央委員会も除名をよくすまいと思ふのであるが、小生の考ではこの期を逸せず、関東の各県は除名されて、別口の農民組合の旗を立て、本部を東京に置いて全国に正義派を結合すれば、例の共産派と手を切り、総本部の改革（病コウモウに入る）も苦もなく出来ると思ふ。私もさういふようになれば、及ばず年ら兄等の旗下に馳せ参ずるであらう。日本農民組合といふ名を共産系の若い衆に進上するのが一番よからなしかと思ふ……」（『日本労農新聞』第二三号、一九二七年十一月十日）

山上は結局は日労党に参加しないのであるが、この親書は彼の動揺とともに、日農内にも左翼の進出に反撥する空気があったことを示している点は否定できない。

前掲「日本労働党創立の経緯と雑感」と題する一通信記事は、日農内部の左翼の進出に対する総同盟内部のうごきについて次のようにのべている。

「然しながら松岡、赤松等も麻生氏も等しく日本農民組合が左翼化される事に対しては、之を何とか転回策を講ずる必要ありとし、大阪に於て十月五日夜総同盟の西尾、松岡、赤松、麻生氏等は農民組合の杉山、莊原、三宅氏等と会合し、しつりに左翼派の進撃的態度を拒斥し、第四回党中央委員会に協力提携する様懇談する所あつたけれ共、農民組合の以上の諸君は組合内部に於て総同盟の意圖に副ふべく努力したが、大勢は左翼派に有利で遂に如何ともなし難きを知り、同月中旬此旨を総同盟側に通達するに至つたので、松岡、西尾、赤松氏等は到底、農民組合の中堅分子を以て頼み少き者と失望し、遂に労働党脱退の止むなきを感じたものゝ様である。右に對し、麻生、望月、藤岡、岩内君等は宣敷労働党を固守し、農民組合の右翼勢力と呼応して、左翼の進撃を撃退すべしとの積極論を持し（労働党獲得論）を持したけれ共、如何とも力及ばずして二三日の総同盟政治部会に於ては以上の諸君の絶望的沈黙の裡に『脱退決議』は空前の『満場一致』を以て決定さるゝに至り、その結果として、二四日の脱退事実となつたのである。」

この脱退は十月二十、二二日、大阪における日農拡大中央委員会で三団体に対する門戸解放が決議された直後のことであつたのである。

この頃から麻生は動揺しながらも、新党構想を抱くに至つた。そして日農に対する工作を開始し、これを新党の天目山と考えたのである。それは次のようにして行なわれた。

「反共右翼の正義派の糾合には、まづ組合長の杉山を口説き落すことが眼目でなければならぬ。杉山を動かし得るものは群馬の須永好と新潟の三宅正一だ。日農で最も信望あり実力をもっているのは須永だが、然し須永は思慮深く容易に動く

まい。須永が納得すれば半ば成功だが、麻生は彼一人では須永の説得に自信がなかった。

かくて麻生は日農工作に彼の政治的生命をかけたが、須永の説得でまづ難関に逢着した。平野は「須永の最も信頼せる同志は足尾の石山寅吉である。麻生と石山が揃って行けばまづ大丈夫ではないか。須永が動くとなれば、麻生と二人で直ちに新潟を廻って三宅を伴い、三人で大阪にまわって杉山を強引に説得して帰京すること」の作戦を立てた。（前掲『麻生久伝』二六九―二七〇頁）

こうして、急速に新党工作の「天目山」である日農工作を完了したのである。

かくて一九二六年十一月二三日、日労党結成趣意書を發表するに至った。これに対し日農青年部、本部は十一月二七日、「中間無産政党组织運動に関する『指令』」を發し、新党が「單一無産政党政破壊、階級戦線攪乱」のほか何者ももたらさないとのべ、青年部の態度を次のようにのべている。

- 「一、政党問題に関して、農民組合の分裂を策するものは徹底的に糾弾して、あくまで分裂に反対すること、
- 二、労働農民党は積極的に之を支持すること、
- 三、新党に対しては、之が真に無産大衆を代表して、而して吾が労働農民党に対して好意をもつものなら、両者の合同も可能であるが、然らざる限りに於ては、絶対に反対して之が排撃運動を起すこと」（法政大学大原社会問題研究所編『日農分裂問題資料』（一九二六年―一九二七年）所収）

このように、日農の活動分子は、新党の結成に困惑し、それを排撃する姿勢をもちつつも、尚日農の内部事情からしてはげしく非難することもできず、結成後の様子を見守り、両党の合同に期待をかけたのである。

以上のような情勢のなかで、十二月五日第四回日農中央委員会が開かれ、満場一致で政党に対する日農の態度を次のように決定した。

「労働農民党と日本労働党とを飽くまで合同すべく努力す。合同ならざる間は、原則として、労働農民党を支持し、特別

の事情ある地方は日本労働党に限り、総本部に届出で承認を得て、入党する事を得。」(前掲「日農分裂問題資料」所収)

一方、十二月九日、新党結成後、農民組合関係者は芝の金杉亭に集った。出席者は、須永好、小島小一郎、牧長治、石橋源四郎、吉岡八十一、河合義一、今井一郎、三宅正一、細野三千雄、三輪寿壮らであった。ここで次のような趣旨の声明書を出すことの申合せをしたといわれる。

「一、杉山氏の辞任は組合員の気分を動揺せしむるが故に吾々は飽くまでこれを支持する。

二、吾々が日本農民組合より分裂するように社会から認められて居るがこの誤解を防ぐ為に吾々は総本部を支持して分裂を防ぐこと。」(同書)

かくして、声明書は明日直ちに発表することとし、文案、方法については三宅に一任することとなった。こうして、「日本労働党支持、杉山組合長支持、分裂反対合同協議会」の名で発表された「日本農民組合員諸君に訴う」の声明が作成された。この声明書は、

「永久に分裂の禍根たる小数の極左分子を排除し、杉山組合長を支持し、実際の政策と階級的態度とを以て、光栄ある日本農民組合の旗の下に一糸乱れず、果敢なる争闘をつけ、外には都市の労働者と提携し、これを労働総聯合と単一政党に結合し、勇敢にブルジョアの政治的経済的努力と闘争すること、これ吾々の願望である。」(同書)

とのべ、日農内の左翼に対して、はげしい言葉で非難した。しかし「分裂派」の印象をぬぐい去るために「日本農民組合旗を守れ」とよびかけることを忘れなかった。

この「全国協議会」は、須永好ら七名の中央委員、争議部員細野三千雄ら四名が名を連ねていた。したがって日農にとってはきわめて重大な問題をはらんでいたのである。しかしその後日農本部常任委員会より電報で声明書の件について問合せた結果をみると、下中伊之助は「オボエナシヨロシクナム」といっており、吉岡八十一は「杉

山組合長支持に關しては協議をうけたが、ピラについては全然知らない」とのべている。また須永好は声明書作成の経過をのべており、「文意、方法について申合せと違う点は責任なし」と微妙な点を残している（同書）。これらからみても、かなり強引に早急にとりまとめたものであり、必ずしも全員一致して日農のその後の事態の發展を予測していたとは考えられない。

ところで、日農内青年部の動向についてはすでにのべたが、左翼の動きはどうか。『無産者新聞』は「日本労働の解体を要求せよ」という論説をかかげ、次のようにのべている。

「日本労働党」の創立は右翼労働組合の大衆が、小ブル的政党の下に彼等を拘束せんとするダラク幹部に対して敢然と反対するために颯起したことを意味する。だが然し、この力は、無産大衆の本来の要求たる階級的大衆的党にまで導かれねばならなかつたものである。

それにも拘はらず、この大衆が既に現存せる唯一の階級的大衆的党たる「労働農民党」の下に結成されなかつたことは、明かに、その指導者が階級の立場を誤つてゐた為でなければならぬ。

而かも彼等が「日本労働党」組織に就て、「労働党」の中に組織されてゐる日本農民組合の分裂を計画し、これを敢行したが如きは明らかに階級的裏切り行為である。」（『無産者新聞』第六〇号、一九二六年十二月十一日）

このように、日労働結成の意識にふれた後、更に日農について次のようにのべている。

「去る八日、日本農民組合中央委員会は、組合に対するあらゆる分裂政策を絶対に排撃すると共に労働党と日本労働党との合同に向つて努力する事を声明した。

全無産大衆の利益を貫徹するために、特にかの社会民衆党、日本農民党の如き小ブル党と闘争し、これを克服するため、労働大衆が一致協力して、唯一の階級的大衆党の下に結成する事は、現在最も緊要なる問題である。

而して、この両党の合同は、ひとへに「階級的」政治的結合の爲になさるべきものであり、従つて、又労働党の勢撃力を分散せしめんとするあらゆる計画に対する徹底的排除——「日本労働党の解体」の要求の上に実現さるべきものである。」（同

紙、第六一号、一九二六年十二月十八日)

左翼ははっきりと日労働の解体を根本方針とし、「日和見主義幹部」をバックロしながら日労働大衆に手をのばすことを主張したのである。

かくして、日農中央は、地方における全国協議会即時解体要求とともに、全国協議会への参加をきびしく禁ずる指令を出した。十二月二五日付指令(前掲『日農分裂問題資料』所収)である。

一方、須永好らは一九二七年一月二三日、「日本農民組合堅実派同盟」を結成し、本部を日農関東出張所におき、いわゆる中間派の結集をはかるに至った。日農中央常任委員会は須永好ら十二名を除名し、堅実派同盟の結成を禁止した。除名された指導者は堅実派同盟を基礎とし、三月一日、全日本農民組合(全日農)を創立したのである。その構成組合は、兵庫、大阪の一部、群馬、千葉等二府十二県といわれている。ここに、文字通り、日農は第二次分裂をとげ、全日農は日労働支持の農民組合となったのである。

三、中堅同盟と日本労働党

すでにのべたように、組合同盟および全日農が、ほとんど日労働と一体となることによって、日労働は形成されたのであるが、中立系組合の日労働支持も、日労働にとって重要な一つの支柱であった。中立系組合は中堅同盟を結成した後、日労働側からの強い要請を受けて、日労働支持団体総連合としての「日本労働総聯合」に加わっている。次に中立系組合と日労働成立との関連についてのべてみよう。

日本労働組合総同盟と日本労働組合評議会(評議会)とのいずれにも属さない中立系労働組合の動向が目立った

のは、一九二六年（大正十五年）に入ってからのことであった。

一九二六年二月十一日、国際労働会議労働代表選出問題で、反総同盟系の諸組合が結束し、「労働代表選出全国労働組合協議会」を開いた。総同盟は、海軍聯盟、海員組合、官業労働の三団体と共に、これに加えられていない（野田津太『評議会議争史』一九三二年、三七五—三七六頁）。一九二六年六月二十日、総同盟を除く十二団体からなる大阪組合会議の提唱によって「全国労働組合代表会議」が開かれ、総同盟はこれに出席しているが、全国的総聯合の問題に対しひとり「絶対保留」という態度をとって孤立している（野田、前掲書、三九九—四〇五頁）。このあと、総同盟は独自の聯合計画を決議しているが、具体的には何の行動もとれないでいる。このように、中立系組合の動向は、最初、反総同盟という形で顕在化している。このため中立系組合の連合計画は、まず右からの批判をあびなければならなかった。「中間派結成運動の一齣」と題する通信記事は次のようにのべている。

「蓋し此の主唱者に於ては我労働組合界に於て中間派の有する特殊の機能を総聯合運動に活用し左右二派を制肘してそこに妥協の余地を見出さんとしたものであるが、右翼聯合派はその計画に明確を欠く等の点から左翼派の側面運動と看做して反つて反対的態度を示したため計画の発源地である関東地方に於ては数個の団体有志を糾合し得たが、大阪に於ける結成運動は僅かに関西電気従業員組合の賛同を得たのみで、其他の中間団体は悉く参加を拒絶し今のところ失敗の跡を止めて居る。」（『労働問題通信』二二八号、一九二六年十月二十日）

しかし、この中間派組合の連合計画は、総同盟からのみ「反対的態度」を示されたのではなかった。関東地方評議会合同大会（一九二六年九月十九—二十日）では、司会者中尾勝男が開会の辞の中で次のように述べている。

「而して最近に於ける我国無産階級運動の情勢を觀るに、一、全国労働組合會議が右翼に依つて破壊された事、一、単一無産政党たる労働党が右翼に依つて閉鎖された事、一、中間派の結成運動が行なわれている事、以上の三つの事柄に依つて

日本の資本主義が反動期に入っている事は容易に知る事を得るのである。ブルジョアジーが其の独裁を叫び、右翼派が彼方の忠実なる助言者になっている中間派の結成は左翼の運動が追いつめられた結果右翼と共に左翼を牽制すべき必要に依り為されたるものに外ならない。」(「労働問題通信」二二四号、一九二六年九月二二日)

これに続いて行なわれた国領伍一郎の本部報告に関して、次のような討議がなされている。

「原沢君(出版労働)——中間派の結成運動は未だ表面に現われていないと思う。

国領君——未だ具体的にはなっていないが、其計画は熟し、早晚具体的なものとなる情勢にある。吾等は右翼派と同様中間派に向って極力闘わねばならん。

長尾君(金庫労働)——中間派の結成について批判分析し吾等の態度を決定、表現の必要ある事と思う。本部の意圖如何。

国領君——中間派は左でも右でもない。勢力の絶大な方に傾くものである。即ち一定の確固たる指導精神を有していないものと思う。吾々としては前言の如く右翼派と共に之に向って極力闘争しなければならん。…

小島君(出版労働)——中間派に対する本部の見解如何。

国領君——中間派は右翼派と共に資本家に対抗するもので右翼派に引づられて行くものである。彼等は階級的に一致せず意見に依って一致するものである。」(同通信)

この当時、中間派組合連合の動きは秘密裡にすすめられていたのであった。一九二六年八月二日、東京市電自治会分裂問題を調停のために集った日本労働組合総聯合(組合総聯合)、東京市従業員組合、関東木工組合、関東俵給者組合は、中間団体結成について協議を行なった。八月八日には、以上のほかに東京市電分裂反対同盟、日本農民組合、豊島合同労働組合などの有志が集って、関東方面の中間団体糾合の計画をすすめ、「統一運動関東地方同盟暫定規約」を起草した。この規約の中では、同組織の目的を「全国総聯合の即時実現」、「大衆的単一無産政党としての労働農民党の積極的支持」と規定している。また事務所は仮に日農東京出張所に置くことになっている。関東地方の準備を終った後、大道憲二、進藤久蔵、原沢武之助等の発起人達は、十月二日に東京を出発、関西へ向つ

た。十月四日以降、組合聯合関西地方聯合会、交通聯合大阪自助会、立憲労働党、農民組合、評議会、関西電気従業員組合などを歴訪したが、関西電気従業員組合を除く他の諸団体はほとんど反対または賛否を保留した。しかし十月九日、その関西電気従業員組合で「統一運動関西地方同盟第一回協議会」を開き、「統一運動関西地方同盟準備会」の組織を決定している。これには農民組合、評議会、朝鮮大阪聯合、立憲労働党が出席している。その後引続いて、純向上会、立憲労働党、日本美術友禪工組合、関西労働聯盟会等を訪問、参加を勧誘した。その結果、十月十二日には、立憲労働党の事務所ではこれら四団体に大阪労働組合聯盟が加わった五団体の会合が開かれるに至っている。しかしそこでは、これらの五団体が「絶対に参加せず」との態度を決定、参加拒絶を申し合わせたのであった（前掲「中間派結成運動の一鱗」）。

中間派組合の連合体結成は、秘密裡にすすめられたが、左右からの批判は避けられなかった。こうして、ようやく一九二六年十一月十九日、全国労働組合中堅同盟を結成することになった。この契機となったのは、右派の新党結成計画発表であった

「市電自治会、関東地方労働組合聯合会は、ひそかに中堅的組合の糾合につとめ同時に関西総聯合、日本司厨同盟、中部方面に於ては日本製陶労働組合を中心として着々中堅同盟の結成に全努力を傾注しつゝあったところ、たまたま十一月二十日安部磯雄氏等の提唱したる新無産政党的促進協議会ありて、中堅派組合の同一なる態度を決してそれに臨むべく東京に集合したる総聯合の坂本孝三郎氏、製陶労働組合の荒谷宗治氏、市電自治会の伊藤誠氏、石毛留吉氏、宮井昌吉氏、吉田藤氏、松坂栄二郎氏、関東地方聯合会の高山久蔵氏、佐藤護郎氏等は十一月十九日夜芝区新桜田町十九番地総聯合本部に協議し、大体の意見まとまって同時に中堅同盟の具体的結成の動議ありて直に結成の運びになり、全国七万を有する中堅同盟は安々と産声をあげるに至った。同時に名称を全国労働組合中堅同盟として新無産政党参加に就て左の声明を發する事になった。

声 明 書

労働農民党分裂して今亦更に安部磯雄氏等を中心とする新政党組織せられんとするも我等は我が国労働戦線の現状に鑑み大衆的政党の組織には更に慎重の考慮を要するものありと信するを以て暫く之に参加することを保留し傍聴者として単に出席す

大正十五年十一月十九日

東 京 市 電 自 治 会
日 本 製 陶 労 働 組 合
日 本 司 厨 同 盟
日 本 労 働 組 合 総 聯 合

それと共に公式或非公式に有志の参加をみたる全国農民自治会、全国水平社中堅聯盟、大阪市電自助会、芝浦労働組合、武相聯盟、蒲田労友会、官業労働組合その他九州、四国、東北、北海道にある有力なる組合に対し勧誘を發して近くその結盟式を舉行する段取りとなつた。」(日本労働新聞「日本労働新聞」第一号、一九二六年十二月十日)

ここまでの経過では、中間派政党結成の動向との結びつきはまだ出ていない。もっとも、前述したように「統一運動関東地方同盟」の場合、日農の有志が参加し、事務所は仮にはあつたが日農東京事務所が予定されていた。当時、事務所の責任者であつた浅沼稻次郎が参画していた形跡が濃厚である。しかし、「統一運動関西地方同盟準備会」の場合、立憲労働党(党首棚橋小虎)は参画を断つている。

一九二六年十一月二三日、日労働の結成計画が發表された。それから二日のちの十一月二五日、日労働結成準備委員と中堅同盟との初の会合がなされ、日本労働総聯合への第一歩が踏出された。

「日本労働党として望月源次、加藤勤十君から政党問題に就て意見交換を求めて来たが、去る十一月二五日山崎今朝弥君の尽力の下に非公式に会合する事となり、当夜左の通り出席者あり、中堅聯盟側、高山久蔵、佐藤護郎、伊藤誠、官井昌

吉、松坂栄次郎。日本労農党側、三輪寿壮、加藤勤十、望月源次。」「日本労農党と中堅聯盟の關係」、「労働問題通信」一三四号、一九二六年十二月一日)

会合の内容は、「総同盟分離派は、分離後に於いて全国的聯合の労働組合を設定する」意向を伝え、「政党内閣に就いて……提携尽力方を求むる」点にあった。だが中堅同盟側では、あまり日本労農党に対し積極的でなく「極めて受動的」立場で応答した模様である。

同じ十一月の二九日にもこの種の会合が開かれようとしたが流会になったらしい。翌三十日、麻生が東京市電自治会の伊藤誠を尋ねてはじめて、中堅同盟の日労党に対する積極的態度が示されるようになった。同日夜、中堅同盟幹部達は集合し、「現在の場合左右何れにも偏せず即せざる所謂中間派としての全国結成を達せん」との方向を確認している。この結果、十二月早々に宮井昌吉が大阪に行くことになった(前掲「日本労農党と中堅聯盟の關係」)。

こうして、ようやく中堅同盟の関西グループも関東グループに同調し、中堅同盟は全体として日労党支持と中間派組合の全国的連合に同調することとなった。この間、十二月三日には、総同盟脱派組合の連合体組合同盟の結成が決定されていた。一九二六年十二月六日、中堅同盟は緊急委員会を大阪の組合総聯合本部で開催したが、これは中堅同盟としては十一月九日結成の際の会合から数えて二回目の会合であった。そして、そこで、従来の中堅同盟を一步進めて、組合同盟と共に日本労農総聯合を結成することを決定したのである(『日本労農新聞』第一号)。中立系組合の日労党支持は、党側からの相当に強引な働きかけによって生み出されたものと言えよう。

四、『社会思想』と日本労働党

—— 思想的基礎 ——

日本労働の結成過程および組織的基礎についてはすでにのべた。ここでは、その思想的基礎について検討してみよう。

日労働が、とにかくわめて急速に結成された一端の理由は、当時の中間派ムードにあったことは否定できない。すなわち総同盟第一次分裂以来、無産運動内部における左右の対立は一層きびしさを増した。それは日本帝国主義の矛盾の激化と、天皇制支配層の左翼に対する弾圧と意識的分裂政策によるものであった。特に一九二六年（大正十五年）は、浜松日本楽器の争議や、新潟県木崎村の農民斗争にみられるような激斗が行なわれた。思想的にも左翼では山川イズムに代って福本イズムが抬頭した。右翼は独立労働協会の創立をはじめ、右翼無産政党的結成のうごきを積極化した。こうした情勢のなかで、左右両翼の指導に反撥を抱くもの、両者の斗争を緩和したり、あるいはそれから逃避しようとするかなり広汎な中間派的ムードが形成された。「中庸は徳の至れるなり」といった伝統的な思考様式がその底流にあったことも否定できない。こうした状況のなかで、中間派の政治的結集をよびかけたものに二つの思想的潮流があった。一つは、雑誌『大衆』を中心としたものであり、鈴木茂三郎らが中間派左翼論を主張した。一方、雑誌『社会思想』のグループは、次第に中間派の積極的主張を行ない、やがて、麻生らの日労働結成にともない、その大部分は、党員ないしは支持者となったのである。このように日労働支持の思想団体となつた『社会思想』グループはまた日労働結成の思想的準備を行なつたともいえるのである。そして、同人の三輪

寿壯、河野密らはやがて日労党の最高幹部となっていくのである。

ところで『社会思想』は一九二二年（大正十一年）四月新人会OBによって創刊された。発刊の辞によれば、発刊の経緯は次のごとくである。一九二一年秋、新人会は創立三周年を機として、大学生のみの会としてとどまることになった。そこで会員でなくなったOB達が社会問題の研究をつづけ、新しい社会の実現のために努力することを申し合せ、その第一着手として『社会思想』を発刊したのである。同人には、平貞蔵、嘉治隆一、岬山正道、新明正道らが参加し、社会主義理論の紹介、訳出を主とし、現実の社会問題や社会運動の解説や批判を時々行っていた。しかし次第に、普通選挙など現実の問題を中心として扱うようになった。特に無産政党あるいは社会運動への批判や提言では、河野密は主要な論客となったのである。

一九二六年の十一月河野は、「左右両翼の対立と労働農民党の前進」を同誌（第五卷十一号）に発表した。日労党結党の直前に発表されたこの論文の中では、まだ中間派政党論が正面切って展開されていないが、中間派理論の成立根拠というような形で、問題の提起が試みられている。まず河野の労働農民党に対する位置づけは次のようなものであった。

「我々は何を置いても労働農民党を樹立せしめなければならぬと考へる。労働農民党はそれ自身尚多分に組合主義的、改良主義的色彩を有つだろう、場合に依つてはより右傾化するかも知れぬ。然しかくして確立された労働農民党は、一個の勢力を形勢することに依つて、無産階級運動の保壁をなすものである。その保壁は、何にも増して、左翼の結成及び成長に對しての保壁である。労働農民党の樹立は左翼に對して最も有効なる保障である。

左翼の政党主義は、これをおしつめると、自ら現在の労働農民党を克服しつゝ本来の意味のマルクス主義的政党―更に現在の客觀的条件を以てすれば職業的的革命家の組織―の樹立に向つて進まなければならぬ。恰も評議會が、労働組合運動に於

てマルクス主義的労働組合として、所謂右翼組合に対抗しているように。然しこれは現在の状況に於て果して可能であろうか？私は当分それは不可能であると思う。況んや労働農民党にそれを期待することは尚更出来ぬ。要は日本の資本主義の没落が、労働農民党を保壁として左翼の結成を計らねばならぬほどに切迫しているかの観方の相違に基づく。私は勿論かく切迫せるものと観ないのである。」

この観点からすれば、山川均の労働農民党に対する「左翼の進出政策」は受容できないものであった。河野は山川の「現実の把握」を妥当であると考え、それと最近の「左翼の進出政策」との間の有機的關係を検討すると、「山川氏の政治行動に対する考え方、無産階級政党に対する考え方は、ここ数年の間に著しく動揺していると言わなければならない」としている。そして、ではなぜか、とその理由をたずねると、福本の政党論が出てくるのであった。「結合する前の分離」というマルクスの結合の原理によって、斗争の過程における左翼分子の結成が行なわれなければならないとする福本の考えが、山川の「左翼進出政策」の中に「密輸入」されているのではないかと、河野は推察している。

山川・福本など左翼の誤りと共に、右翼の問題を考え合わせると、「私は端なくも中間派の問題に行き当る」として、河野は次のような中間派理論をこの論文のしめくりという形で提起している。

「私は筆硯を新にしてこの問題を論じようと思う。唯私の考へを端的に述べるならば、所謂中間派は従来左翼、右翼何れにも気がねをする態度であった。然かもそれが一個の実証主義である意味に於ては日和見と言われて仕方のないものであった。然し今や中間派は左右両翼に気がねすることではなくて、それ自身一個の主義を有つべき時期に到達したと言ひ得る。労働農民党の死活——それは中間派の主張が尚レーゾン・デートルを有つか否かに懸っていると思う。」

この考え方は、すでにのべたように総同盟内における麻生らの考え方と相通するものである。麻生は一九二六年

(大正十五年)労働農民党の誕生にあたって『無産政党とは何ぞ』という著書を發表しているが、このなかで労働農民党を合法的な大衆的政党であると規定し、共產主義者排除の方法について一致していない点にこの党の将来の不安があるとしている。つまり、左翼を含めた共同戦線党ではなくて、左翼を排除した合法無産政党を構想していたのである。これは、実践的には日農内部の右派と呼応し、労働党から左翼の指導を排していこうとする「積極論」となるのである。これが総同盟内で、労働農民党脱退の「消極論」と対立したことはすでにのべた通りである。河野は、労働農民党の前衛党化および山川の「左翼の進出政策」を批判し、現在の段階ではマルクス主義的政党は必要でないこと、労働農民党は「無産階級運動の保塁」をなすものであり、特に、左翼の成長に対する有効な保障であることを強調している。

この、「左右両翼の対立と労働農民党の前途」の続稿として書かれたのが「所謂中間派の積極的主張」であり、『解放』の一月号に發表された。日労働成立の直前に書かれたこの論文では中間派政党の立場をかなり明確化してゐる。

「所謂中間派の論拠は、日本の実情に応じて、如何にして左翼的精神を現実の上に生かすかの問題に関する具體的解答の一である。」

「左翼精神は、福本エンド・コンパニー製造の丸薬のみに限つた訳ではあるまい。大衆の需要の爲には別な外皮に包まれるものがより必然であるかも知れない。少くとも『社会思想』製造の所謂中間派と刻印せられた丸薬が、却つて瀕死の政党運動にとって、起死回生の良薬にならないと誰が言ひ得ようか?」「善きにつけ悪しきにつけ、所謂中間派の立場は、日本労働党の活動に依つてその本質が露呈せられるであろう。重ねて言う、所謂中間派とは、左翼精神を、大衆と共に如何に呼吸するかに関する解答の一である。吾人もとり中間の主張を以て唯一絶対とは考へない。然し現在に於ては最も合理的な解答の一であることを信ずる。」

つまり、河野は、「左翼精神の現実化」のためには、中間派日労働党の結成は最も正しい道であるというのである。それは「日労働党創立趣旨書」にある「左右両翼を切断して無産階級運動の正道を行く」という日労働の初期のイデオロギーと一致したものである。

ところで、このような河野の思想的立場は一体どこから生れるのか。彼の思想の骨格はどこにあるのか。

一九二四年十二月の『社会思想』（第三巻十号）誌上で発表した「労働組合と政党との関係」では、労働組合と政党との関係は、組合が主か、政党が主か、という問題にしぼられるとして、それに対する解答を次のごとく与えている。

「カウツキーも政党と組合との関係を二つの手に譬へている。併し彼は手が手としての働きをなす為には、一個の命令的中心——頭腦の存在を必要とする。而してこの頭腦の役割を演ずるものは組合に非ずして政党でなければならぬ、と言つて No.」

「命令的地位に立つべきものは政党でなくして組合でなければならぬ。この点に於て私はカウツキーと正反対の立場に立つものである。」

このような組合主義の確定は、「理論が如何にありしかと云うことと共に、實際如何にあるかと云うこと」を見ることよつてなされるとし、理論上の帰結を求める為には「我々はまずマルクスに立脚しなければならぬ」とする。ところでマルクスの学説を検討してみると、マルクスはあるところでは労働組合の価値を高く評価しているが、あるところでは政治斗争を昇揚していることがわかる、つまり「マルクスに依れば、労働組合は政党よりも重大である。然し労働組合は政治行動よりも重大でない」（傍点は原文のまま）というのが、河野のマルクスの理解であった。組合と政党との関係は解放運動上の情勢によつて決定されるものではあるが、理論的には「労働組合は政

党よりも重大である、何となれば政党的運動は勢い分派的のものとなるに反して、組合は階級的の運動であるからである」河野は結論するのである。河野にとっては政党的組合との関係は「どちらが重大か」といった量的差異の問題としてとらえられているのであり、そこには指導の問題が脱落している。しかし、革命政党的の必要を真向から否定するのではなくて、「現情では必要でない」というように、現実をからまして否定するのが「マルクス主義者」河野の特徴であった（前掲「左右両翼の対立と労働農民党の前進」をみよ。）

では、現情をどのように認識するのか。一九二五年八月（第四卷八号）の『社会思想』には「日本労働運動の大観と総同盟の分裂」が発表された。ここでは総同盟の第一次分裂に関する河野の見解が端的に表明されている。この論文は全体の四分の三が日本資本主義の構造と労働運動の特質の分析にあてられている。「資本主義の発展段階に順応して、労働運動の戦術もまた自ら変化する」からである。河野は、日本の資本主義が「未だ工業資本主義化せられざるに先立って、早くも国内的に行き詰りつつある」点、「色濃く封建的色彩を以て塗られている」点、「その誕生の発端から、帝国主義の揺籃の中に育まれた」点の三点を指摘する。そこから「農村に於ける無産人口の過剩」「階級的対抗の代りに、大小規模の騒擾—アウフスタント若しくはブッチェを随所に惹起すべき危険性」「反動的勢力の抬頭とその執拗性」「当然無産大衆たるべきデラスされた分子の反動化」「無産階級の横断的団結の困難」「国家社会主義に依る戦列攪乱の危険性」「経済行動即政治的行動たるのパラドクシカルな傾向」などを導き出している。この結果、労働運動は、産業中心地における労働組合の拡大発展、農民との提携、未組織労働者の組織化、新旧中間階級対策の樹立などを当面の課題として、いることが結論される。このような分析成果に基づいて、河野は、総同盟の第一次分裂に対する評価を行なっているのである。

「日本に於ては労働組合の組合として団結せらるべき可能性は著しく限局されている。にも拘らず、尚相對的にその余地の残されていることは争うことが出来ない。何をしておいても先づこれに組織を興へ、運動をして大衆化せしむることが目下の急務ではあるまいか？私はこの意味に於て総同盟の分裂をそのままに意義を認めることの出来ないものである。総同盟の分裂を墮落幹部に対する戰鬥的分子の反逆だと解し、無条件に肯定するならば、それは余りに簡單な観方である。総同盟の分裂を以て、日和見主義に対する真正のマルキシストの戦であるとして解するならば、それは余りにも観念的な解釈である。」

河野は「『そちらも悪いがこちらが悪い』と言う喧嘩両成敗的な観方をせざるを得ぬ」と述べているが、實際には「左翼の分裂主義」批判に重点を置いていようである。それはこの論文の結びの言葉から十分にうかがえる。

「繰り返して言うが、革命主義的に進むべきと、改良主義的に進むべきとは、時機の問題である。最高の刹那に至って無産大衆を裏切るものは改良主義者であり、日和見主義者である。然し、常に革命的手段を以て万能なりと考へるものは反對の誤謬をおかすものである。現在在は徒に口舌に急進的な意見を戦わすことが問題でなくて、大衆の中に沈潜して行き、それを組織し訓練して行く時機でなければならぬ。この意味に於て私は両者の共同を慫慂し、両派の反省を促し度い。」

このように、河野は総同盟第一次分裂における左翼の立場を批判する。そして、現在の段階は、「大衆の中に沈潜して行く」時機であるとするのである。「革命主義と改良主義」は時機の問題であるという見解と併せ考えれば、河野は結局は指導政党は現情では必要ではないという、組合主義の立場に立っていたのであり、この観点からの左翼批判を展開したのである。

河野の「方向轉換と政治行動―北条一雄氏を駁す―」が『社会思想』誌上に現われたのは、一九二五年十二月号（第四卷十二号）においてであった。福本和夫（北条一雄）が「山川氏の方向轉換論の轉換より始めざるべからず」を発表したのは一九二六年二月号と五月号の『マルクス主義』（二二、二五号）誌上においてであったが、河野はいち早く福本と山川との理論的差異に着目し、福本が公然と山川批判を展開する前に両者の見解の質的に違ふ点を

指摘したのであった。それがこの「方向転換と政治行動―北条一雄氏を駁す―」であった。河野は、ここではじめて本格的に労働運動史を分析対象に選び、友愛会創立以降の労働運動の歴史の考察の中から、特々な方向転換論を設定した。一九一九年以降、資本主義の不況に伴い、労働運動は第一回の政治的転向を行なう。議会否認的、直接行動的な政治行動の傾向がそれである。一九二一年以降、経済恐慌の進展と共に社会主義の理論が先駆的労働組合を動かすようになった。第二回の政治的転向である。労働ロシア不干渉、ロシア承認、三悪法案反対など、その現われであった。しかし労働運動は行詰りふたたび転換する必要に迫られていた。その時関東大震災が発生し、第三回の政治的転換が急速に展開されることになる。

「偶々震災に依って打撃を蒙り、反動勢力の驚くべき抬頭を見たと、曲りなりにも政府が開明的の政策を実施せんとする傾向を示したることに依り、所謂方向転換論が實際化するに至ったのである。従って方向転換論の中には二個の意義が含まれている。経済的行動から政治的行動への転化と、直接行動的政治行動から議会を通じて行なわれるべき政治行動への転化―これである。前者の標語としては大衆政策、後者の標語としては議会利用の叫び声の挙げられた所以であらう。」

福本が、方向転換の内容として、経済的行動から政治行動への転換、その過程における前衛集団の確立を指定するのに対して、河野は、経済行動から政治行動への転換はすでに行なわれた、今問題なのは同じ政治行動と言っても直接行動的政治行動から議会を通じて行なわれるべき政治行動への転換なのであり、その過程における「先駆的労働者の無産大衆への沈潜であるとする。このような観点から河野は、「若し北条氏の解せらるるが如きが方向転換の意義であるとするならば、少なくとも山川氏の『前衛』に述べられた方向転換論と著しく運動の観方を異にするものであり、卑俗な散文的な歴史の、歪曲された概念的の観方であると言わねばならぬ」としたのであった。河野は次のようにのべている。

「レーニンの眼中にあつたのは、当時の事情に應ずべき、献身的な職業的革命家の組織である。それは最も嚴格なる集中的組織の下に立つた、嚴重なる訓練に堪へ得る少数者の組織である。今我々の眼前にあるのは、多かれ少なかれ、この過程を経過した分子が、自ら大衆の中に沈潜して行くべき問題である。」

「所謂方向転換は、職工組合主義から政治行動への転換ではなくして、政治行動内の一より他への転換である。」

そして、議会の意義、改良主義的政策の意義を強調して行つてゐるのである。この方向転換のとらん方も、きわめて通俗的であり別に新しい内容はないが、注目すべき点は、前衛、あるいは左翼分子の結集を否定し、「大衆の中へ」を一面的に強調するとともに、「政治斗争へ」を「直接活動から議会主義へ」としてとらえてゐることである。

このように検討を進めてくると、河野の思想は根本的には組合主義、議会主義であり、右派の主張とほとんど異なる所はない。その所論も中間派の姿勢をとりながら、主として、左翼の批判を行なつてゐる。この場合、福本イズムに対しては、組合主義の窓を通してであるが、かなりの確かな批判を行なつてゐる。山川に対しては部分的には承認しながら、福本主義の密輸入があるとし、結局は共産主義に通ずるものとして批判してゐるのである。河野は「けんか両成敗」的見地にたち、ある場合には「マルクス主義者」としての左翼的ポーズをとつてゐるが、思想的立場は右派とほとんど同一であり、典型的な社会民主主義であるといえよう。だから右派との相違は大衆の動向に対するある程度の敏感さ、その左翼的表現にあるといつてもよいであらう。

このほか『社会思想』の同人達、平貞蔵あるいは嘉治隆一などの論文も多かれ少なかれ、この河野のような傾向を示してゐる。こうして、『社会思想』は日労働党の思想的基礎を提供することになるのである。

一九二六年十二月九日、日本労働農党の創立大会が行なわれた。綱領、政策ともほとんど労働農民党と同じものであった。その立党宣言は次のようにのべている。

「親愛なる同志諸君！ お互に左右両翼の戦には飽き飽きした。大衆の要求や氣持を無視したこんな争いのために、我々は過去一年有半進撃どころか却って退却に退却を続けて来たではないか！我々は徒なる観念的斗争のために否定的になった運動の指導者を知っている。我々は唾棄すべき個人的排撃のために反動化した大衆を知っている。過去の運動は煩鎖であり、憂鬱であり、利己的であった。我々はかゝる現状打破のためどれほど陰忍し、どれ程大きな犠牲を払ったことか。併しすべては無駄だった。ヒステリーの様になっていがみ合っている左右両翼は、我々の正論に耳をすら傾け様とはしない。我々はもう我慢が出来なくなつた。我々は深く左右両翼を切断して無産階級運動の正道を樹立する時代に到達したのだ。」

田所輝明は一九三〇年十二月に書かれた、「日本労働農党史」(『日本無産政党史』所収)のなかで、立党宣言を次のように批判している。「両極翼の分裂主義を攻撃するのみで、日労党の他党と区別すべき唯一の存在理由たる統一への大道統一への展望を全く欠いている。」「日労党を先ず築き、その城砦によって単一大衆党の戦取を真に意識したのは少数先進分子であつて、多数は、『左右両翼の戦いに飽き飽き』して安住の天地を求めんとする空気に支配され、そこに固定せんとする左右両党に対峙して中間的固定の空氣が漂う。この田所の批判は、『正道確立の旗高く』(『日本労働新聞』第一号) 出発した日労党が一年後の大会では『階級的大衆的統一政党主義』に転換する理由をよく示しているようである。左翼から日労党に転じた田所は、日労党に対する中間派という左翼の批判を考慮し、階級的正道主義から統一政党主義へ転化したその後の歴史をふまえて、この立党宣言を批判しているのである。それにしても、労働農民党と政策綱領において、ほとんど差異のない日労党は中間派的ムードに依拠せざるをえなかつたのである。その組織的基盤は組合同盟にせよ、中堅同盟にせよ、中小の組合がほとんどであり、評議会あるいは総

同盟に比べて極めて微力であった。全日農しかりである。このように日労働は組織的にも弱体であった。しかも、イデオロギー政党ないしは世界観政党たりうるような強固な思想的立場は有していない。既にのべたように、それを支えるものは、組合主義であり議会主義であり、社会民衆党と異なる所は少ない。その差異は「左翼的表現」にすぎないといってもよいであろう。とするならば、日労働とは一体いかなる独自の立場を有するのか。それは階級的正道主義から、統一そのものを旗印とするシヨクバイ政党に転化せざるをえない運命を、すでにその創立の歴史の中にもっていたといわなければならない。中間派的ムードを、上から強引に固定化し、政党内に結集したものが日労働の姿であった。

では、日労働の創立は一体いかなる歴史的意義をもったのであろうか。山川均は、「日本労働党の出現は、少なくとも二つの力の交叉を意味している」と考へる。第一の力は、総同盟内部に関する限り、右派に対する第二の革新運動としての意味をもつ。第二の力は、「中間派左翼結成」の第一歩としての危険な力であると考へるのである。すなわち、単一協同戦線論の立場から、山川は、日労働の右派に対する斗争という一定の積極的意義を認めつつ、それが中間派左翼に固定化する危険性を指摘したのである（『左翼の斗争』一九二七年）。北浦千太郎もほぼ同様の立場から「ブルジョアジーの無産階級間における牙城総同盟の分解」と解し、積極的進歩的役割をみとめた（『福本イズムの清算』『社会科学』一九二七年八月）。

これに対し、雑誌『マルクス主義』のグループは、山川や北浦の見解は「折衷主義」であるとし、日労働の結成をもつて、「中間派大衆の前進に対する追隨的組合主義幹部の『反動』」（『無条件合同論』の反動的役割）阿部平智一市川正一『マルクス主義』四二号、一九二七年十月）と評価したのである。そして、日労働の理論を提供した『社会思

想』を「我國に於ける中央派の典型」(西雅雄『マルクス主義』一九二六年九月、十月)とし、次のような対日労党方針を提起している。

「日労党幹部―その指導精神―に対する全無産階級政治斗争の立場よりする批判―果敢なる斗争―克服、日労党大衆の労農党への獲得……かゝる過程を通じてのみ、真に全国的なる、真に階級的なる協同戦線党としての労農党を高めうるであらう」(「日本労農党の分析」水野茂夫『マルクス主義』一九二七年一月)

以上の立場は、主として福本イズムが支配していた時期の『マルクス主義』グループの見解を示したものである。彼らは日労党の反動的役割を指摘することに急であり、日農という大衆団体を上から分裂せしめた役割についてふれていないし、具体的な労働農民党と日労党との統一戦線、それによる大衆の獲得についてふれていない。

ところで、山川イズム福本イズムの克服のうえにうちたてられたコミンテルンの「日本問題に関する決議」は次のようにのべている。

「かかる分離と戦い日本プロレタリアートの大衆組織の設立のために努力する事は共産主義者の任務である。それ故に労働総同盟、農民組合等のごとき組織を分裂させた日本共産主義者の一派は根本的に誤謬であった。大衆的プロレタリア組織の存在は日本共産党の正常な健全なる発展のために絶対に必要なる前提である。日和見主義的改良主義的指導者に対する斗争は労働組合および大衆的政党の左翼的分子を分離しないような仕方、しかしながら、これらの組織の内部で指導者を暴露し、これらの大衆を闘いとするという仕方で行わねばならぬ」(『コミンテルン日本にかんするテーゼ集』青木文庫、所収)

このような戦術をもって、労農党と「中央派の勢力下にある日労党」とを融合せしめる事に努力しなければならぬ、とのべているのである。この「二七テーゼ」も、日労党に対する評価は、さきのマルクス主義グループと同じく、きわめてきびしい。しかし、先にのべたように、大衆政党や組合の分裂を合理化するのではなくて、その内部

で、下からリーダーシップを戦いとることを強調しているのである。

ところで、日労党に対して、追隨的組合主義「左翼」社会民主主義、あるいは中央派、中間派という性格づけがなされているが、中央派ないしは中間派とは何か。レーニンが国際的な社会主義運動が、第一次世界大戦前後から各国で三つの流派をうみ出したことを分析した。そして、(一)終始一貫して日和見主義政策をとっている排外主義者、(二)日和見主義のてつていした敵、かれらは各国ですでに名のりをあげはじめており、内乱をめざす革命的活動をおこなうことのできるひとたちの、左右両翼をあげた後、第三のグループとして次のように性格づけている。

「(三)、とほうにくれて動揺している人びと、かれらは、いまは日和見主義にくつついてよちよち歩いているが、日和見主義をいわば科学的に、マルクス主義的に(ふざけてはいけな)正当化しようと偽善的な試みをおこなうことによつて、プロレタリアートにもっと多くの害毒をあたえている。この第三の流派のなかのほろびつつある人びとの一部はこれをすくいだし、社会主義へ復帰させることができるが、それには、第一の流派、まり、軍事公債への賛成投票、「祖国擁護」「戦時法への服従」を正当化し、合法性に満足し、内乱を拒否することを正当化しかねないすべての人びとと、なにはおいてもきつぱりと手をきり、わかれるという政策によるほかない。」(レーニン「死んだ排外主義と生きている社会主義」)

このレーニンの指摘はきわめて示唆的である。すなわち、中央派を、動揺派としてとらえ、現在の政治状況でも日和見主義を左翼的言辭で正当化している最も悪質なものとして性格づける。しかし、右派の政策ときつぱりと手をきらせることによつて、その一部は眞の社会主義に復帰させうるとしているのである。ここにはいわゆる政治的リアリズムが貫いているように思われる。こうした中央派の性格は、日本の中間派日労党に関して多かれ少なかれ妥当する。

日労党は、その指導部の大部分は根本的には日和見主義の立場にたっていた。しかしその基礎には、総同盟右翼

幹部の指導に不満をもって、たちあがろうとした多くの大衆があった。日労党はこうした大衆の進出を大衆団体の内部で分裂させ、中間派に固定化させる役割を果たしたのである。だからこの点に関しては日労党全体のなかに、「進歩的な側面と危険な側面」をみとめる山川や北浦の見解はやや形式的である。しかし、同時に「大衆の左翼化、中間派幹部の反動化」としてとらえる『マルクス主義』グループの見解も固定的一面的ではないか。

日労党は当時の無産階級運動のなかでの「動揺派」であり、中立的ムードに支えられた党派であった。しかし、その指導部は本質的には組合主義、議会主義であり、左翼的言辞を特長とした。そして左右両翼と同罪ではあるが、総同盟や日農内部に深刻な分裂をもちこんだ役割についてはきびしく批判されるべきものをもっていたのである。しかし、その動揺的性格からして、決して全面的に、「反動」「裏切」よばわりすることは正しくないであろう。彼等の一部は「社会主義に復帰」する可能性をはらんでいた。少くとも、当面の戦争と天皇制ファシズムの政策に反対する行動においては統一しうる要素をもっていたと考えられるであろう。

本稿は、テーマ「日本における社会民主主義の研究」昭和三五年度文部省科学研究費（総合研究）の交付をうけた。厚く謝意を表したい。

また、本研究のはじめから、資料整理その他の困難な、仕事を担当してくれた法政大学大学院学生高橋彦博、大野節子の両君に深く感謝する。